

指標名: 入院患者の排泄に関わる転倒・転落発生率

背景

B6病棟は消化器内科病棟であり、急性期から終末期まで様々な状態の患者がいる。高齢の患者や疾患によっては腹水や下肢浮腫、貧血や麻薬使用中によるふらつきが著明な患者、肝性脳症により転倒を繰り返している患者が多い。さらに絶食が続くため点滴を24時間投与しており排泄回数も増え、スタッフが少ない夜間の転倒にも繋がりがやすい患者が多いと考える。壇らも「転倒・転落全体の83件では内科28件(33.7%)、消化器外科25件(30.1%)、脳神経外科20件(24.1%)、整形外科は10件(12.0%)であったと述べるように、常に消化器内科である当病棟の患者の転倒リスクは非常に高い。更にほとんどの患者に転倒転落プランの立案がされ、患者教育もされている。しかし、認知機能の低下や判断能力低下、看護師への遠慮や羞恥心などが原因の一部となり、転倒転落件数は2016年度(60件)に比べて2017年度は78件であり、増加傾向にある。また2017年度の転倒転落で排泄がきっかけであったものは32件であった。(転倒転落全体の41%)よって今年度は排泄に関わる転倒転落発生率に注目し、特に眠前の排泄の促しを強化することでの転倒転落件数の減少を目指した。

データの定義

定義(分子)

入院患者に発生した排泄に関わる転倒および転落の件数

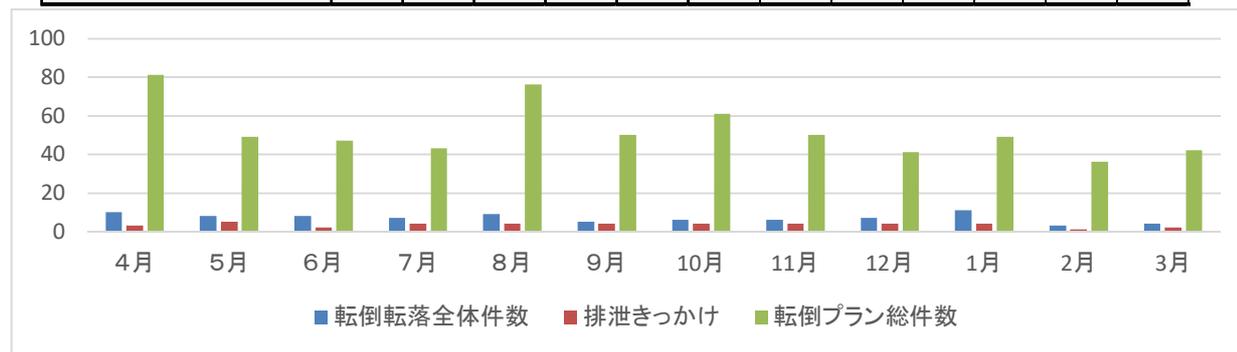
定義(分母)

転倒転落のプランを立案した件数

\* 転倒転落のプランは看護診断ラベル「転倒転落リスク状態」、または他の診断ラベルでも成果指標に「転倒転落」が含まれているものとする。

2018年度のデータ

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
転倒転落全体件数	10	8	8	7	9	5	6	6	7	11	3	4
排泄きっかけでの転倒	3	5	2	4	4	4	4	4	4	4	1	2
転倒転落プラン立案件数	81	49	47	43	76	50	61	41	41	49	36	42



参考データ

入院患者の排泄に関わる年間平均転倒転落発生率は4.7% (2017年1月~2017年12月)

評価

2017年度の年間平均転倒転落発生率4.7%に比べ、2018年度は4.8%と増加傾向にある。2018年度の転倒転落件数84件のうち41件が排泄をきっかけに転倒している。その中でも介助者がいたのは1.7%であり、患者が単独で移動しようとしていることが非常に多い。せん妄や認知症の既往があり、ナース

コールの活用が難しいと看護師がアセスメントし、離床センサーを使用していた患者は2.6%であるが、離床センサーを使用しているにもかかわらず緊急入院、状態変化や不穏状態にある患者の対応などで業務が煩雑になり、他患者の対応のために離床センサーが鳴ってもすぐに訪室できず転倒に至ってしまったものもある。点滴を持続投与することを主治医と検討し減らすことはなされているが、4.6%の患者は持続点滴施行中であったことから、今後も可能な範囲で減らしていく必要があると考える。また転倒している時間帯で多いのはワユ帯、日勤帯、遅番帯の順番で多く、ワユ帯の中でも夜中22時～3時頃までは朝方の転倒件数の2倍であった。このことから夜間はスタッフが少ないことに加え、業務が煩雑になりやすく、十分なケアが出来にくいことで、せん妄や不穏状態に陥りやすい。次年度は療養環境を整えることやせん妄や不穏の患者への対応をせん妄ケアガイドを活用したプラン立案にて積極的に行い、課題の一つとして挙げていく必要があると考える。

#### 参考文献

壇 美津代ほか. 急性期病院における転倒・転落の現状と診療科ごとの特徴: インシデント報告から. 日本転倒予防学会誌Vol. 2:45-52 2015